

『ウクライナ・日本語辞典』の半世紀

日 野 貴 夫
ボンダレンコ I. P.

幻の辞典との出会い

興味深い一冊の辞典がある。アナトリ・デブローワ、ワシーリ・オヂネツ共著、保田三郎編纂、『ウクライナ・日本語辞典』、ハルビン、1944年、(Діброва А., Одинець В., Під редакцією Ясуда Сабуро, “Українсько-Ніппонський словник”, Харбин, 1944.) である。われわれの知る限り、この辞典の原本は、日本の大学図書館、及び公共図書館には存在しない。

この辞典については、東京大学の中井和夫氏が「アメリカのなかのウクライナ、そして日本」の中で紹介されている。あるとき、戦前にハルビンで出た『緑のウクライナ』というパンフレットを⁽¹⁾読んでいた彼は、その中に『ウクライナ＝日本語辞典』(準備中)という広告を目にした。驚いた彼はすぐさま都内のいくつかの図書館を当たってみたが、どこにもそんな辞典など存在しなかった。数年後、彼はアメリカへ留学した。彼には、ニューヨークで是非会いたいと思っている人がいた。その人は、イヴァン・スヴィトという戦前に満州でジャーナリストをしていた方で、1972年には『ウクライナ・日本関係』という戦間期の満州におけるウクライナ人と日本の関係についての⁽²⁾370頁にも及ぶ大著をウクライナ語で出版されている。中井氏が彼の家を訪れ、帰り際に何気なく頭の片隅から離れなかった辞典のことを尋ねたのがきっかけで、スヴィト氏所蔵のこの辞典の原本を手にとることができたのだった。

実は、スヴィト氏は、この『ウクライナ・日本語辞典』とは極めて密接な関係にある。この辞典の序文にも触れられているが、彼は「本辞典が生まれ出づるに当って異常なる熱意を以て参加せられた」協力者の一人として名前が挙がっている。彼が具体的にどのような協力をしたのかはよくわからないが、当時のウクライナ人と日本人との関係に最も精通しており、双方の橋渡しの役割を担っていた人物であったことは間違いない。

のちに、スヴィト氏は、この著者の一人であるオヂネツのメッセージの入った『ウクライナ・日本語辞典』の原本は自分の手元に残し、ニューヨーク公共図書館に、マイクロフィルムとして蔵書に加えることに同意されている。⁽³⁾今回本稿を執筆するにあたって利用させていただいたのは、ニューヨーク公共図書館に所蔵されているスヴィト氏の原本のマイクロフィルムを、中井氏が更にコピーして日本に持ち帰られたものである。その恩恵に浴し、極めて間接的な形ではあるが、われわれもこの幻ともいふべき辞典に巡り合うことができたのである。

辞典の構成

それではここで、この辞典の構成について見ておくことにしよう。表表紙には、ウクライナ語で Анато́ль Дібро́ва та Васи́ль Оди́нець と2人の著者の氏名が示され、大文字で УКРАЇНСЬКО-НІППОНСЬКИЙ СЛОВНИК とタイトルが書かれ、1944と発行年が記されている。そして背表紙には日本語の縦書きで、「ウクライナ日本語辞典」というタイトルがあり、その下に2行にわたって ワシーリ・オヂネツ、アナトーリ・ヂブローワ共著と記されている。タイトルページから始まる前付は、表表紙裏にはウクライナ語で、第1葉には日本語で表紙と同じ内容の事が書かれてあるが、編纂者である保田三郎の名前が記され、さらにウクライナ語の方には、“Видано заходами Української Національної колонії м. Харбин”（ハルビン市ウクライナ居留民会発行）という一文が、発行年の上になら書かれてある。そして次葉にはウクライナ語と日本語の2カ国語で「ウクライナ民族独立総体国家復興の為に闘った総ての人々の栄誉の記念として且つ此の偉大なる思想の遵率者に対し此の小著を捧げる」という献辞が記されている。

次のページは、著者二人の連名による「序文」である。これはウクライナ語と日本語の対訳という形式をとっているが、この辞典出版の意図及び特徴をよく表わしている⁽⁴⁾ので引用してみたい。

日本及ウクライナ両国民の相互理解を容易ならしめ且之等両国民の多岐な文化的交流への道を伸べんとする著者等の希望は此の最初のウクライナ・日本語辞典を編纂せしむるに至った。

勿論本辞典に載せられて居る一万一千語は決して精選されたものでは無いが唯随時の最も責任ある検討及翻訳者の深き労作に依って将来必要なる補正並に変更が加えられるであろう。

以上の理由に依り上記の如き単語数はウクライナ日本語辞典編纂に必要な材料の総ての量を包含していないことを指摘しておく必要が有る。最初のウクライナ日本語辞典を出版すると云う試験的可能性を持つに当り当初著者達は付録としてウクライナ学及ウクライナ語文法を解説辞典として試用せんとしたが本辞典の紙数制限の結果最初の計画を放棄せざるを得なくなった次第である。

本辞典編纂の基礎資料にはグリーンチェンコ及サフチェンコの両辞典を選んだ。ウクライナ語の日本語訳はワシーリ・オヂネツ之を担当し辞書編纂に関する諸作業即ちウクライナ露語原文の採集、ウクライナ文字に依る日本語表現前書即ちウクライナ学に関する概観ウクライナ文字に依る表現、並に公正及出版に関する諸作業はアナトーリ・ヂブローワ之を担当した。

本辞典の編纂を終了し、著者等は日本、ウクライナ両文化の接近と云う大事業に対比せば本労作は単なる一小事業である、と云う事を自認しつつも高き道德的且満足感に満されて居る。

……以下省略……

そして次に、この辞典を執筆するに際して利用した参考文献が挙がっている。

1. Словар Української мови, упорядкований Б. Гринченко, видавництво журналу «Кієвская

- Старина». м. Київ, 1907-1909 рік. т. т. 1, 2, 3, 4.
2. Л. Савченко – Практичний Українсько-Російський, словник. вид. 5-е. Державне Видавництво України, Київ, 1926 рік.
 3. В. Дубровський – Словник московсько-український, видавництво «Рідна Мова», Київ, 1918 рік.
 4. В. Дубровський – Українсько-московська фразеологія, Київ, 1918 рік.
 5. С. Ясуги – Русско-Японский словарь, издательство Иванами-Шотен, Токио, 1938 г.

以上の5点である。「序文」でも触れているように、この辞典編纂の基礎資料となったのは、1の革命前にキエフで出版されたグリチェンコ著、『ウクライナ・ウクライナ語辞典』と、2の革命後にやはりキエフで上梓されているサフチェンコ著、『ウクライナ・ロシア語辞典』である。

次のページは、ウクライナ語で再び ПЕРЕДМОВА「序文」が掲載されている。これを書いたのは、発行所であるウクライナ居留民会の長であり、発行者であるクラブコ・コレッキー教授である。彼はこの序文のなかで、「民族間の相互理解において強大なファクターとなるのが言語である」と述べ、ウクライナ民族の持つ華やかな歴史、文化、文学、そして経済資源の豊かさを解き、アジアの国「偉大な日本」との間に初めての『ウクライナ・日本語辞典』が出版されることを歓迎している。

さて、この辞典を百科辞典的な役割も兼ね備えたものにしたという著者の意図は、次から4ページに渡ってデブローワが ВСТУП「序論」として書き下ろした『ウクライナ小論』によく現れている。これは、ウクライナに関する知識も情報も殆ど持ち合わせなかったであろう当時の日本人を対象に、分かりやすくウクライナ概説を書いたものである。この小論は7節から成っているが、簡単にその内容について見ておこう。

第1節では「ウクライナ」という言葉の由来について述べられている。この中で、ウクライナの別称である「ルーシ」という言葉については、現代ロシア人と称されるモスクワ民族により「ルーシ」という名称は専有併合されたためその名称を放棄し、「ウクライナ」という名称を用いてきたと書かれている。また「小ロシア」という名称はウクライナにとっては全く無関係なもので、いわゆる「血縁関係を強調する為に」ロシア人が特殊使用したものであると厳しくこの名称を批判している。

第2節ではウクライナ民族の起源、ウクライナの領土及び人口について触れている。ここでは、正しく「スラヴ」民族たるウクライナ人は一千年を経てスラヴ民族のあらゆる根本的性格の特徴を保持してきたことを述べ、様々な歴史的原因によりウクライナ民族の一部が中央アジア、シベリア、カナダ、極東などに移住したことが書かれている。またこの辞典が編纂された極東は地理的にも気候的にもウクライナと酷似しており、「緑のウクライナ」と呼ばれ、1943年初頭までの資料によると極東地方全人口270万人中、ウクライナ人125万人、ロシア人110万人であったことを強調している。

第3節は、ウクライナ語についての記述である。また、他のスラヴ諸語との相違点についても触れている。「『スラヴ』民族の総ゆる言葉の中で『ウクライナ』語はセルビア語に頗る近似し

ている」という指摘は面白い。

第4節は、ウクライナの歴史、特にギリシャ正教移入の過程とその後についての記述である。正教の教会がウクライナ民族の文化的発展に非常な好影響を与えたことは疑う余地のないところであり、ウクライナ民族はロシア人が正教に改宗するのに重要な役割を演じたとしている。ロシアは文化面においてもウクライナ文化の恩恵を蒙ったにもかかわらず、歴史を歪曲し、ウクライナ民族との血族関係を強調していると正面からロシア人を批判している。

第5節は、ウクライナ詩発達の歴史について書かれている。ヂブローフはこれを口碑民族詩と文学という二つのグループに分類して論じている。民族詩の大部分は遠い昔の過去、まだウクライナ民族が異教徒だった時代のものであること、またウクライナは、寓話、短編小説、童話、諺、謎々のような口碑叙事詩にも富んでいることなどを述べている。そして文学においては『イーゴリ遠征物語』を最古の文学作品の傑作の一つに数え、19世紀初頭に現れたコトリャレフスキーを「新ウクライナ文学の父」と称し、ウクライナ最大の詩人シェフチェンコへと話を進めている。ただ、シェフチェンコを語るにあたり、ヂブローフは彼の作品のことは殆ど触れず、彼が所属していた政治結社キリロ・メトロディー団と彼に対する迫害について多くを語っている。その後の「ウクライナ文芸復興」及び19世紀の60年代から始まる「ウクライナ芸術語の猛烈なる発展」を経た20世紀初頭までの著名な作家が列挙されている。

第6節は、演劇に充てられている。17世紀の宗教劇から「新しき文化の父」コトリャレフスキーの作品について述べられているが、ここでより多くの紙面を割いているのは19世紀におけるロシア政府のウクライナ演劇に対する弾圧の歴史である。

第7節はウクライナ民謡についてである。ウクライナ民謡には、勇敢、豪毅、大胆である反面頗る情に脆いウクライナ魂が確然と反映されており、二万以上に達するウクライナ民謡及び歴史的叙情詩は、ウクライナ民族英雄の偉大さを讃えるものだとして述べている。そして、この節を締めくくりに当たってゴゴリのロシア民謡とウクライナ民謡を比較した論文を引用している。ゴゴリによれば、ロシア民謡が人生の忘却、現世から逃避して日々の不如意と煩悶を和らげようとしているのに対し、ウクライナ民謡は生命と一体化したものであり、その調子は叫びではなく、物語のような言葉で話され、人の心を感動させるものだという。ヂブローフは、一般的にはロシア文学者として認められてはいるウクライナ出身の作家ゴゴリの論文を引用し、ウクライナ民謡の秀逸さを述べることによって、ロシアの文豪ゴゴリのウクライナに対する深い愛情、ひいてはウクライナの優越性まで読者が読みとるよう意図していると考えるのは、少し言い過ぎであろうか。

『ウクライナ小論』の次のページには УКРАЇНСЬКА АБЕТКА 「ウクライナ文字」の一覧表が掲載されている。それぞれの字母に番号を付し、次に大文字と小文字、そして発音はカタカナとローマ字で表示されている。

本文に入るまでの最後のページには、著者の УВАГА 「附記」と銘打たれた文章がウクライナ語と日本語で載っている。

本辞典中の露訳は専ら既に露語に熟達してるか若は現在修学中の日本人の為に比較的且補助的材料として掲載されたものである。

其の他露訳中に於て日本人読者はウクライナ語と露語中に異なる意義を有する単語を発見するであろう。

日本語への訳は専らウクライナ語の原語より為された。

故にウクライナ語と露語との相違によって露語の単語の或者の意味は必ずしもウクライナ語と一致せず単に近似的且補助の意味を有するに過ぎない場合もある。

著者の最も注意を払ったのはウクライナ語と日本語間に於ける翻訳の正確さである。

このようにこの辞典において、ウクライナ語の見出しの語の次に示されるロシア語訳は補助的なものに過ぎず、あくまでこれが『ウクライナ・日本語辞典』であることを執拗なまで強調している。

そして全7葉にわたる前付に続き、次のページから、この辞典の本文である「辞書の部」となる。266ページある本文の書式は、左右二段組で、47行である。辞書の表記の方法は、ウクライナ語の見出し語の次に括弧つきのイタリック体でロシア語訳を示し、その後日本語訳を書き、さらに日本語訳の発音を括弧つきのウクライナ語で示している。また、この辞典における正字法は、1928年にハリコフで開催されたウクライナ言語学会議において制定されたもので、現在のそれとは異なる⁽⁵⁾。具体的な語彙の分析は後述する。

いわゆる「辞書の部」が終るとすぐに奥付になっている。上から、西暦1944年を意味する当時の満州国の年号で、「康德11年4月7日印刷」、「康德11年4月10日初版発行」、「定価金拾圓」と記され、そのタイトルの『ウクライナ日本語辞典』、そして著作権の証明があり、著者、編者、発行者、印刷者、印刷所、発行所の順序で各々の氏名と住所が書かれている。

以上がこの辞典の構成である。

収録語彙の分析

ここで、この辞典の著者であるアナトリ・ヂブローフとワシーリ・オヂネツについても一度整理しておきたい。彼らはどちらもウクライナ人で、「序文」に書かれてあるように、前者がウクライナ語の選択を、後者が日本語訳を担当したことになっている。戦時中でもあり、様々な困難と制約の中でこの辞典は完成を見た。ただここで確認しておかなければならないのは、彼らは少なくともウクライナ語の専門家ではないということである。それは何よりも語彙の選択に顕著に現れている。例を挙げると、голоднеча「飢」「飢餓」「飢饉」や голодранец「ぼろを着た男」「貧しい人」など頻度の低い語彙は収録されているが、「飢え」という意味をもつ голод や голодный「飢えた」などの頻度の高いものが欠落していたり、いかに小さな『基本単語集』にも出てくる「300」、「400」といった数字が収録されていない。次に、学習者にとっては非常に重要であり基本的なこと

である「品詞の表示」がなされていない。また、動詞に関しては「不完了体」、「完了体」の区別をなしていないばかりか無秩序にどちらかの動詞だけが収録されている場合が散見される。さらに、これについては後述するが、方言や廃語また俗語などが非常に多いのにもかかわらずそれが示されていないことは、この辞典を利用する学習者にとっては大きな問題となる。以上がこの辞典の筆者がいわゆる専門家ではないと考える根拠であり、この辞典について、われわれが指摘したい問題点である。

それでは、収録語彙を具体的に検討していくことにしよう。

a) ウクライナ関係の語彙（ウクライニズム）

まず最初は、この辞典の大きな特徴でもあり、ウクライナのことについては殆ど知識のない者にとってはとても重宝する見出し語から始めたい。この辞典に百科辞典的色彩を加味しようという意図が働いていたことはすでに述べたが、その意図と成果はここに収録された語彙から十分に伺うことができる。このグループに属する語彙は、おのずとウクライナ固有のもの、もしくはウクライナと関係の深いものがその大多数を占めることになる（資料1参照）。例を挙げよう。

Гуцульщина (*местность, заселенная украинцами на Карпатских горах*) グリツヤ（ウクライナカルパーツ山脈地方の名）(гүцүрiя – укруiна карупато санмяку-но на)

Запаска (*одежда, заменяющая юбку украинской женщины*) ①女の下着（ウクライナ人独特の）(онна-но сiтагi укруiна-зiн докүтоку-но) ②ウクライナの女がスカートにする一種の毛織物 (укруiна-но онна-га сукаато-ни-суру iссю-но кеорi-моно)

Центральна Рада (*высший правительственный орган Украины, который провозгласил 22 января 1918 года в городе Киеве независимость Украинского государства*) 「ツェントラリナラーダ」1918年1月22日キエフ市に於てウクライナ国家の独立を宣言せるウクライナ最高政府機関

шипка (*род печеного хлеба на свадьбе в Украине*) 結婚式の時に使用するパン (кеккон-сiкi-но-токи-ни-сiйoo-суру-пан)

恐らく、筆者はウクライナに特に関係の深いこれらの項目に対して最も心血を注いだのではなかったらうか。百余の項目は、読者をウクライナの世界に導いてくれるような気さえしてくる。

b) 方言

この辞典に収録されている語彙の中には、非常に多くの方言が含まれている。その多くは西ウクライナ方言である。勿論、辞書の中に多くの方言が含まれることを自体決して悪いことではない。問題なのは、前述したようにこの辞典には何の説明もなされていないことである。われわれは、参

考文献として挙げた4種類の辞典を使って、全ての語彙について検討した。われわれが利用した辞典は、2点がウクライナにおいて出版されたものであり、残りの2点が外国（カナダとアメリカ合衆国）で出版されたものであるが、国内と国外のどちらの辞典にも「方言」と表示されているものだけを採用した。⁽⁷⁾また、見出し語の後ろに標準語を表記した。なお、文法上（性、数）、形態論上そして発音上の「方言」は、語彙の後ろに*をつけて示した（資料2参照）。

c) 廃語（過去の表現、古語）

一万一千の語彙の中には、現代標準ウクライナ語では殆ど使われなくなったものも含まれている。その数は52語にのぼる。ここでも見出し語の後ろに標準語を表記した。なお、*を付した語彙は、形態論上もしくは発音上の「廃語」である（資料3参照）。

d) 俗語（無遠慮な語彙、蔑称、罵言、卑語）

われわれがこの辞典の語彙を分析していて気づくことは、口語の多さである。概ね全収録語彙の一割がそれにあたる。元来ウクライナ語は、例えばロシア語などと比較すると口語の数が多いたのが特徴である。これは歴史的に、ロシア語が文章語を中心に発達してきたのに対し、ウクライナ語は口語が発達し、いわゆる現代標準語の成立が遅れたという事情があったためでもある。そのため口語の多くは、現代標準語の語彙となっている。ここでは、明らかに標準語では用いられない口語である俗語のみを選んだ（資料4参照）。

e) 国や国家の名称

ここで取り上げるのは、今まで検討してきた語彙とは性格が少し異なる。しかし、辞典にどのような国や国家が収録されているかという問題は、筆者の意図ひいては辞典全体のヴィジョンを知る上でも興味深いことである。この語彙を見るとヨーロッパの中ではイギリスやフランス、また隣接している中国やモンゴルの項目もない。また「ロシア」として挙げられている *Московія, Московщина* は、蔑称に近い俗称であるのが面白い。さらに、ソ連という見出し語が無いのも注目される（資料5参照）。

結びにかえて

以上、この辞典に採用されている語彙についての分析を試みてきたが、ここでこの辞典に関する若干の問題点を指摘しておきたい。

この辞典については、その成立過程において不明な点が多い。ソヴィエト社会主義共和国連邦の誕生後、四半世紀が経過し、ウクライナは公式的には完全に一共和国に過ぎなくなって久しく、ウクライナ語の必要性なぞ全く認められなかったであろう時代に、何故これほどの辞書の出版を敢行したのであろうか。発行所はウクライナ居留民会であるが、刊行資金は日本軍もしくは南満州鉄道

株式会社から出ている。この辞典の二人の著者は、あくまでウクライナの独立、自立を主張するウクライナ民族主義者であることは日を見るよりも明らかである。だとすれば日本側の真意は一体何だったのか。また、保田三郎以下この辞典の出版に携わった日本人は一体どういう人物だったのか。ますます興味の深まる問題である。これらについてはいずれ稿を改めて検討したい。

さてわれわれが、本稿で全ての語彙を分析し、分類したのにはそれなりの思惑がある。もし可能であるならば、日本及びウクライナでこの辞典を再版したいという希望である。そしてその際には、われわれの指摘を何らかの形で役立てたいと考えている。今年で50才の誕生日を迎えるこの辞典は現在においてもその価値を失ってはいない。これが半世紀も前に出版された初めての『ウクライナ・日本語辞典』であるという歴史的価値は確かに大きい。また、現在のところこの種の辞書が存在しないということでも貴重である。しかしそれだけではない。この辞典には筆舌に尽くしがたい魅力がある。それは恐らくこの辞典を出版するに際しての著者の情熱から来るものなのであろう。その情熱は半世紀を過ぎた今でもひしひしとわれわれに伝わってくる。それは、彼らを選択した見出し一語一語に感じられる。確かに、彼らを選択した語彙は頻度辞典に対照すれば、極端に偏ったものだし、方言をはじめ、廃語、俗語などいわゆる標準語から逸脱した語彙が目立つ。それにもかかわらずわれわれを魅了するに足るものなのである。学問的、専門的範疇からするとこの辞典は及第点はもらえないだろう。とはいえ、現在のように機械的に頻度辞典に照合し、分担作業で多くの人によってできるだけ客観的に作り出される辞典が圧倒的多数を占めるご時世にいと、このような情熱をもって生み出された辞典こそ本来のあるべき姿なのかもしれないという気もしてくるから不思議である。

現在われわれは、新しい『ウクライナ・日本語辞典』の準備をしている。収録語数においては、この辞典を凌駕するものではない。われわれの目指しているのは、本稿での指摘を踏まえた言わば『現代標準ウクライナ・日本語辞典』である。その意味で、今回取り上げた辞典とは内容的に大きく異なるものになるはずである。そして、半世紀前の筆者のたつての願いであった「ウクライナ文法」の解説も兼ね備えたものにしたと考えている。

注

- (1) 『窓』45号、ナウカ発行、1983年、14-16頁。
- (2) Світ І., Українсько-японські взаємини. 1903-1945. Нью-Йорк, 1972.
- (3) マイクロフィルムには、1959年10月22日、スヴィト氏がこの辞典をニューヨーク公共図書館に、極東で出版されたウクライナ関係の書物2点とともにマイクロフィルムとして蔵書に加えることに同意する旨の手紙も一緒に収められている。しかもこのオリジナルは、著者の一人であるオヂネツが、1944年9月9日にスヴィト氏に謹呈したものであることが前付の余白ページに記されたウクライナ語のメッセージにより伺える。そこには「親愛なるイワン・ワシーレンチ・スヴィトに祖国の益たる我々の仕事に対する素晴らしい記念として」と書かれている。
- (4) 以下引用に際してはできるだけ原本に忠実であることを心がけた。したがって意味不明の部分もそのままにしてあるところがある。ただし明らかに誤植である場合は、それを訂正した。また、一部旧漢字を新漢字に改めたり、旧かなづかいを新かなづかいに変えた。なお、マイクロフィルムの状態によって、判読が困難な箇所があったが、対訳の場合は意味を損わない程度に補ったところのあることを断っておく。

- (5) この正字法は、1946年に現在の正字法に変更される。その違いは主に、外来語において現れるが、大きく分けて次の4点である。
- a) 外来語において“ia”, “iu” というスペルを持つ単語は、旧正字法においては“iа”, “iу” となる。例えば“Ліада”, тріуmf など。現在では, “Ліада”, тріumf となる。
- b) いくつかの外来語においてみられた軟語の“j”。例えば, 旧正字法においては археологія, лампа であるが, 現在では, археологія, лампа である。
- c) ギリシャ語の“th” というスペルを持つ単語が, ウクライナ語に借用された場合, 旧正字法においては“т” となる。例えば катедра, етер, патос など。現在では, кафедра, ефір, пафос となる。
- d) ドイツ語やポーランド語からの外来語で“h”, “g”, “gh” といったスペルを持つ単語は, 旧正字法においては“г” となった。しかし, 1946年の変更によってウクライナ語のアルファベットからこの字母が削除され, “г” で代用するようになった。1991年の独立以後この字母の復活をめぐる論争が続けられているが, 新しいウクライナ語の教科書においてはすでにこの字母は復権している。また一部の新聞, 雑誌においても使われ始めている。
- (6) われわれが検討したこの辞典に現れる全ての語彙は, 最後に資料として掲載した。ただしロシア語訳, 日本語の発音表記ならびに番号は省略してある。
- (7) 後述する廃語と俗語についてもこの4点の辞典を使って検討し, 国内と国外の複数の辞書に表示されているものだけを採用した。

参 考 文 献

1. Академія наук Української РСР, Українсько-російський словник. (вид 5). Київ, 1984.
2. —————, Російсько-український словник в 3-х томах. Київ, 1980-81.
3. Andrusyshen C. H., Krett J. N., Ukrainian-english dictionary. (2nd print.). Toronto, 1981.
4. Podvenko M. L. Ukrainian-english dictionary. (2nd ed.). New York.

(資料1) ウクライナ関係の語彙 (ウクライニズム)

Автокефальна Українська Церква ウクライナ自治正教教会, бандура バンドウーラ, бандурист バンドウーラの弾奏家, Басарабщина ベッサラビア, Великдень 復活祭, вечерниці 青年男女の夜の集り, Водохреща 耶蘇洗礼祭, Всеукраїнський 全ウクライナの, гайдамака 18世紀に於ける波瀾に対する民族的革命主義者, гайдук ウクライナ貴族の従者, гаківниця ウクライナ古代の火打銃, Галичанин ガリチア人, Галичина ガリチヤ, галушка 汁で煮た小麦団子, Гетьман ウクライナ王, ウクライナ国家の統治者, ウクライナ中世の軍の頭目, голодна кутя クリスマス前夜の蜜飯, гопак ゴバック, гривня ウクライナ古代貨幣の名, Гуцул グツル, Гуцульщина グツリヤ, державна рада 参議府, 参議院, 國務院, джура 従卒, 召使, Донбас ウクライナのドン河流域地方, Донеччина ウクライナのドン河流域地方, дума 思い, 考え, 思想, 考慮, ウクライナ民族の古い歌, думка 考え, 思想, 意見, ウクライナの短歌, жовто-блакитний стяг 青黄旗, жовтоблакитники 青黄主義者 (ウクライナ民族主義者の別称), запаска 女の下着, ウクライナの女がスカートにする一種の毛織物, “Заповіт” ウクライナの作家「タラスシェヴチエンコ」の作った民族歌の名称, Запоріжжя 中世紀にドニエプロ河の早瀬の前にあるホールチツップ島にあったウクライナコザック要塞地, ウクライナ独立民族思想であるザポーリーズムの根拠地, 現在ウクライナ南方にある都市の名称, запорожець ウクライナザポロジェに居たコザック, змосковити ロ

シア化させる, змосковлений ロシア化された, змосковлення ロシア化, зросійщений ロシア化された, зросійщення ロシア化, зросійщити ロシア化する, карбованець カルボヴェネツ (ウクライナの貨幣の単位), керсетка ウクライナ女の上衣, клейнод ウクライナ頭目王家の章標, Клечане Свято 聖霊降臨祭の第一日, кобза コブザウクライナの民族楽器, кобзар コブザ楽器演奏者, “Кобзар” ウクライナタラス・シェフチェンコの詩書の名, козак ウクライナの兵, ウクライナのゴザック騎士, колядка 「クリスマス」若しくは新年の祝歌, 祝歌を家毎に歌い歩くこと, колядник 前記の歌 (コリャーダー筆者注) を歌う人, колядувати 前記の歌 (コリャーダー筆者注) を歌うこと, коновалівці 1938年5月23日和蘭のロッテルダムに於てコミンテルンの刺客の手に倒れたるウクライナ民族主義者コノワレツ大佐の思想的後継者, коповик 五十銭, крепак 農奴, 奴隷, крепачтво 農奴制, крепачка 農奴 (女), 奴隷 (女), кріпак 農奴, 奴隷, кріпачтво 農奴制, курінь 仮小舎, ウクライナ古代ゴザック兵の班舎, ウクライナゴザックの連隊, ліра ウクライナ民族の古代楽器堅琴, 七弦琴, лірник 七弦琴演奏者 (検校), мазанка 粘土壁の小舎, мазепинець ウクライナ大ゲットマンマゼッパの名を冠して称するウクライナ民族独立運動闘争者, могорич 契約成立の際の飲酒, 酒手, 茶代, наддніпрянський ドネストロ湖の, ドネストロ河沿岸地方の, Наддніпрянщина ドネプロ河沿岸地方, наддністрянський ドネストロ河畔の, ドネストロ河沿岸地方の, Наддністрянщина ドネストロ河沿岸地方, наддунайський ドナイ河畔の, ドライ河沿岸地方の, обмосковлений ロシア化された, обмосковлення ロシア化, обмосковлювати ロシア風にする, ロシア化する, ロシア化させる, оселедець 鯪, ウクライナ古代のゴザックのまげ, Отаман Головний (1918-1921) 「ゴロヴヌイ オタマン」 (「オタマン」の頭) とは「ウクライナ」人民共和国の在った時期に於ける「ウクライナ」国民軍の最高階級の名称である。此の「ゴロヴヌイ オタマン」の階級を最初に得た「ウクライナ」人は「ウクライナ」に侵入した「ソヴィエトロシア」に反対して起った「ウクライナ」戦争の時に於ける「ウクライナ」国民軍総司令官「試問, ベトリューフ」であった, ОУН /Організація Українських Націоналістів/ ウクライナ民族主義者の団体, очіпок ウクライナ婦人の頭飾, очкур ズボンのバンド, паляниця ウクライナパン, панщина 賦役, 小作料, 借地料, 強制労働, перелаз 塀塔に登る場所, Переяславська Угода 「ペレヤスラヴ」条約1648年から「ウクライナ」首領「ボグダン」ジイヴィ・フメリニツキイ」支配化の「ウクライナ」国は右岸「ウクライナ」の支配下に置かんとした波瀾と戦争状態に在った。此の戦争は約6年間続いた。同盟国の必要を感じ首領「ボグダン」ジイヴィ・フメリニツキイ」は長期交渉の結果「モスクワ」国皇帝「アレクセイ・ミハイロヴィチ」と軍事条約を締結下。同条約は1654年1月6日「ウクライナ」の「ペレヤスラヴ」市に於て署名され「ペレヤスラヴスキイ」条約と名付けられた。同条約により「モスクワ」及「ウクライナ」両国は第三国との戦争に於て互いに援助すべく義務付けられた。此の条約の根本目的は波瀾の侵略に対して向けられていた。其の後の事件の進展と共に此の「ペレヤスラヴスキイ」条約は「モスクワ」国の侵犯するところとなり「モスクワ」国は「ウクライナ」国を占領してしまった, песиголовець 狗頭の人, Петлюра

Симон「ペトリューラ・シモン」1918-1921年ウクライナ国民は自国の独立の為ソ連と戦った。その時のウクライナ国民の領袖であり、国家の長であり、且つ軍事司令官であった。1926年5月25日巴里に於てコミンテルンのスパイ、シヴァルツバードなるユダヤ人に依り殺された、петлюрівець「ペトリューリヴツイ」とは「ウクライナ」の国民的英雄「シモン・ペトリューラ」の名に因み「ウクライナ」民族主義者及民族自覚を有する「ウクライナ」人を言う。「ペトリューリヴツイ」なる語は「ウクライナ」「の語テルミン」となり又同様に民族的自覚を有し中央の「ウクライナ」民族の独立国復興に企てして居る「ウクライナ」人を意味すると云う「ウクライナ」国の敵の「テルミン」ともなった、підгорянин 山麓の人, плахта ウクライナ女の三層下着, ウクライナ民族の婦人服, Полуботок Павло ポルボトク・パヴロ ウクライナの英雄1723年にウクライナの為に敵から殺された, прапор жовто-блакитний 黄青色国旗は「ウクライナ」民族の国旗である。旗は二個の粗布からなっている。下方青色の布は海に洗われる「ウクライナ」の土地を意味する。其の海を「ウクライナ」人は古代より他国人との交易に若へ進軍路として利用して来たものである。上方の黄色の布は農耕に対する「ウクライナ」人の伝統的結び付きを意味する。其の結果「ウクライナ」の平野は厚い黄色に実った穀物で覆われている, прапор малиновий 濃赤色旗は偉大なる「ウクライナ・カザック」首領1648年ウクライナポーランド戦争始まった時に「ボグダン・ジノウイー・フメリニツキー」に依り「ウクライナカザック」国民軍の旗章とされたのである。現在濃赤色旗は一般民族的伝統に従えば「ウクライナ」の民族的青年組織「シーチ」と「ルーグ」の旗章である, “Прометей”「プロメテイ」(ウクライナ, タタール, アゼルバイドヂアース, グルジア人の民族的政治的結社にしてソヴェート・ロシアによる占領後各民族指導者により結成せられ民族的独立闘争問題の相互援助を目的とする, “Просвіта” ウクライナ教化の会, просвітнянин ウクライナ教化の会員, самостійник ウクライナ独立運動者, свита ウクライナ広潤な上衣, 百姓外套, СВУ /Союз Визволення України/ ウクライナ解放同盟, Свято Державности ウクライナ独立記念日(一月二十二日), сердюк 近衛兵, Січ ウクライナのコザックの本営, січовик ウクライナの兵隊, ウクライナ青年団員, Слава!「スラーワ」とはウクライナ人の戦闘的民族的叫びである即ち日本万歳に相当するのである, Слава Україні!「スラーワ・ウクライニ」の(「ウクライナ」に栄あれ)とは「ウクライナ」民族主義者及び総ての民族的自覚を有する「ウクライナ」人の民族的叫びである「ウクライナ」に栄誉あれりなる言葉を使って通常「ウクライナ」人はお互いに出会ったとき祝祭日及個人的幸福的音信の際に歓迎し合うのである, Славута「スラウータ」河(ドニエプル河の古代名称), Слово о полку Ігоревім イーゴリ大侯の軍隊に関する軍記。ウクライナのイーゴリ大侯が12世紀にボロウエツ人征伐に失敗した事に就ての昔のウクライナ国民叙事詩。昔の日本の軍記物語と同種類のもの, “Сокіл” ウクライナ青年スポーツ団体, сотня 百, 百人中隊, ウクライナのコナック騎兵連隊, стрілецтво 第一次世界大戦当時における特別のウクライナ兵士, стрілець ウクライナの兵士, 弓手, 射手, “Сурма” ウクライナ国粹主義者の新聞, тризуб「ウクライナの国章」, УВО /Українська Військова Організація/「ウクライナ」の秘密軍事組織, Україна понад усе!

ウクラなり（一行脱落したものと思われる「ウクライナは何よりも崇高なり」ぐらいの意味だろうか―筆者）此の標語はウクライナ民族主義者及総ての民族的自覚を有するウクライナ人の基本的標語の一である、україножер ウクライナ嫌いな人、Українська Автокефальна Церква ウクライナ自治教会、Українська Академія ウクライナ学士院、Універсал ウクライナ政府の刺命、刺令、刺書、宣言書、声明書、УНР /Українська Народна Республіка/ 1918、1920年ウクライナ人民共和国、хутір 農家、田莊、農民部落、小村、хуторянин ウクライナに於ける田莊の住民、ウクライナに於ける百姓、цабе 右へ（ウクライナで牡牛の馭するに用する声）、Центральна Рада「ツェントラリナラーダ」1918年1月22日キエフ市に於てウクライナ国家の独立を宣言せるウクライナ最高政府機関、цоб 左へ（牡牛を馭する時に用する声）、чумак ウクライナの牛車の馭者、чумацтво 馭者業、Шевченківський заповіт「シェフチェンコ」の遺言状と偉大なる「ウクライナ」国民詩人「たらず・シェフチェンコ」が1845年12月25日「ベレヤスラウ」市に於て書いたものである。同遺言状は音楽に作り替えられ、総ての後世人に「ウクライナ」民族の理想実現の為の闘争に馳せ参ぜしめ且参ぜしめつつある此遺言状は第二「ウクライナ」国民歌である。御身らよ私を葬ってくれ / 私が立てなくなったならば / 故郷のウクライナのステップの塚穴にこそ / 広々とうち開かれた平原と / 我がドニエプルの流れと急阪を / 遙かに望み見て力強い / 大河の怒濤が聴き度いのだ / 私を葬ったならば起き上り / いましめの鎖を断ち切るがいい / 邪悪な凶敵の血の溝で / 彼らの自由を洗ってやるのだ / その日こそ偉大な家庭で / 新しい自由の世界で / 私の事をも御身たちは / 私やかな、静かな言葉で / 追想してくれ、Шевченко Тарас「シェフチェンコ・タラス」は「ウクライナ」民族の偉大なる詩人であり芸術家である。旧暦1814年2月25日に農奴の家に生れ1861年3月10日に死去した。彼の才能は逸早く当時の「インテリ」に見いだされ、24才の時2500留と以て購われ自由の身となった。「ペトログラード（原文ではベテルブルグ―筆者）」芸術院を卒業した彼は類多の詩を書いた。これを一纏めにしたのが「ゴブザール」と呼ばれる書籍である。彼の詩の中で最も逸れたものは「ウクライナ」民族解放運動を歌った「ガイダマーキイ」「カテリーナ」「ウェリーキー・リロフ」「ナイミチカ」其他多数である「シェフチェンコ・タラス」の総ての詩はウクライナ民族の独立復帰に関するあからさまなる欲求に満ち満ちた精神で貫かれて居る。彼は「ウクライナ」の外人に依る統治反対闘争を指揮した事により中央亜細亜に十年間追放され其の間詩を書く事も又絵を描くことも禁ぜられた。「ウクライナ」人は「シェフチェンコ・タラス」の自分の予言者であり民族思想の受難者と思ひ彼の著作「ゴブザール」は各「ウクライナ」人の家庭に於ける座右の書物である此の本は近親者が死亡せる際死人と共に貴重品として墓に埋葬されることも稀ではない「キエフ」市近傍「カーネフ」の「ドニエプル」河岸丘上にある「シェフチェンコ」の墓には回教徒が「メッカ」に赴く如く「ウクライナ」人は彼の葬られて居る聖地を訪ね且其の墓を礼拝せんが為に「ウクライナ」の各地から参集する、шеляг「ウクライナ」古代の小貨幣、шишка 結婚式の時使用するパン、шулики 蜜と生姜入りの菓子、щедрівка 大晦日の晩歌、“Ще не вмерла Україна” ステェネ ヴメルウクライーナ «ウクライナは未だ死なない»……これは「ウクライ

ナ」の国民歌である次に其の一節を引用しよう。「ウクライナ」は未だ死なない / 栄誉も意思も / 未だ我々の兄弟には / 運命の女神が微笑であらう / 我の敵は消失せるであらう / 太陽の前の朝露の如くに / そして自由に我々は / 自分の祖国に住めるであらう / 我々は心も身も / 自由の為に投出そう / そして我々が / 「カザック」兄弟であることを示そう / 祖国のなめつつある / 恐ろしい時代を想起し / そして我がウクライナの為に / 死んだ人人をも / 「カザック」の騎士の / 名誉ある死を想起し / そして我等の青年時代を / 無駄に過すまい / 我々は心も身も / 自由の為に投出そう / そして我々が / 「カザック」の兄弟であることを示そう。

(資料2) 方言

абахта /вахта/ 営倉, андіряк /опіум/ 阿片, атрамент /чорнило/ インキ, бабкуватий /старкуватий/ 皺の多い, бакун /тютюн/ 刻み煙草, бережак /прибережний житель/ 沿岸の住民, блищак /світляк/ 螢, братанич /племінник, небіж/ 甥, братителі /двоюродні брати і сестри/ 従兄弟, 従姉妹, братова́ /жінка брата/ 兄弟の妻, брат у других /троюродний брат/ 再従兄弟, брунатний /смуглявий/ 暗色の, 浅黒い, будучина /майбутнє/ 未来性, 将来性, бузівок /однорічне теля/ 一歳の仔牛, велико /багато/ 甚だ, 大いに, 極めて, 沢山に, верзиця /пустомолот, торохтій/ お喋り, 無駄口を叩く人, верзіння /балаканина/ 饒舌, 駄弁, вернивода /коловорот, водоверть/ 渦巻, верхівень /вершник/ 騎乗者, вершня /поверхня/ 外面, 表面, 外側, 皮相, 上部, 上唇, вівірка /білка/ 栗鼠, вигіддя /зручності/ 適した, 便利な, вигра* /виграш/ 勝つこと, виємно /винятково, надзвичайно/ 専ら, 独占的に, виляски /луна/ 反響, 山彦, винець /алкоголь/ アルコール, виразка* /ранка, уразка/ 小傷, вислід /результат дослідження, висновок/ 結果, 成績, вихати /розмахувати/ 振る, 振回す, вихвицем /навскач/ 駆足で, відгаль /відпочинок/ 休息, 休憩, відзігорний /франтуватий/ お酒落の, 伊達者の, відлиск* /відблиск/ 反射, 照返し, відліч /віднімання/ 清算, 差引, 減算, ворохібник /заколотник/ 暴動者, 反逆者, ворохібня /заколот, бунт/ 一揆, 暴動, 反乱, всеможний* /всемогутній/ 全能の, годинщик* /годинникар/ 時計師, гоноровий /знатний, вельможний/ 有名な, 著名な, гробовище /кладовище/ 墓碑, 墓地, герлига /вівчарська палиця/ 牧童の棒, гляганець /звурджене молоко/ 凝乳, глягати /звурджувати/ 凝乳になる, гречний /тихий, добрий—про людину/ 温和な, діптянка /повія, проститутка/ 淫売婦, 売春婦, дорадець* /радник/ 忠告者, 顧問, ефектовний* /ефективний/ 効果の著しい, 印象の強い, жадний /усякий, кожний/ それぞれの, あらゆる, 如何なる, 各々の, забийця* /убивця/ 殺人者, загал /громада, суспільство/ 公衆, 社会, загарикати* /загарчати/ 不平を言う, ぶつぶつ言う, загибель* /загибель, погибель/ 滅亡, 没落, збиток /достаток/ 豊富, звідтам* /звідти/ そこから, зворохобитися /збунтуватися/ 激動する, 反乱する, здобіль /достаток/ 豊富, 充実, зизоокий /косоокий/ 藪腕みの, зінське щеня /кріт/ 土鼠, злежень /шпала/

枕木, знакомитий /знаменитий, славнозвісний/ 著名な, 有名な, 高名な, знакомитість /знаменитість/ 著名, 有名, 著名な人, 名士, знатурений /природжений/ 生来の, супа* /суп/ スープ, інженір* /інженер/ 技師, ідальний* /істівний/ 食べられる, ідження* /їжа, страва/ 食事, 食うこと, 食物, ікло* /ікло/ 下の犬歯, кавка /ворона/ 鶇, кадовбина /ополонка/ 氷面の孔, кармалюк /більярд/ 玉突, 撞球, 撞球台, катрага /курінь/ 仮小舎, 掘立小舎, квартира* /квартира/ 住宅, 宿, 宿舍, 宿營, кебета /дарування/ 才能, кип'ячка /нафта/ 石油, 石腦油, 原油, коць /килим/ 敷物, 毛織, 絨毯, кропка* /крапка/ 点, кульчик /сережка/ 耳輪, 耳飾, лепський /чудовий, гарний/ 立派な, 美麗な, маєтковий /майновий/ 所有地の, 所有物の, 恫喝の, маєтність /майно, скарб/ 領地, 所有地, млака /болотна драговина/ 沼沢地, 泥濘地, навпрачки /навпрошки, навпростець/ 真直に, 率直に, наремствувати /докоряти/ 散々にする, 叱責する, 非難する, нежид* /нежить/ 鼻風邪, 鼻カタル, незавадний /нешкідливий/ 無害の, нечупара* /нечепура/ 不潔な人, 汚い人, だらしのない人, 自墮落な人, ниньки /тепер, зараз/ 今, 現今, 現在, нігич /ніскільки/ 少しも, 何等, 豪も, нічняний* /нічний/ 夜の, мужа /воша/ 虱, нюта /заклепка/ 鋸, 目釘, 綴釘, нютувати /заклепувати/ 鋸で留める, 綴釘で留める, 溶接する, оболонщик /скляр/ 硝子職工, обрус /скатерка/ 卓布, 卓子掛, обцас /каблук/ 踵, овіч* /овоч/ 野菜, 青物, 蔬菜, 果実, одружіння* /одруження/ 結婚, 婚姻, окорм /провіант/ 給養, 糧食, 食料品, омаль* /обмаль/ 少し, 僅か, 少く, 些か, 僅に, омизливий /кокетливий/ 嬌態の, омизливість /кокетливість/ 嬌態, оник /нуль/ 零, опришок /розбійник/ 強奪者, 掠奪者, 強盜, 暴漢, 乱暴者, 悪者, Уクライна西部の匪賊, отилий /сутулий/ 猫背の, 前屈みの, かなり屈曲した, пакер /носій/ 運搬人, 赤帽, пані-матка /мати/ おかあさん, 母, параван /ширма/ 衝立, 屏風, перестан /зупинка/ 停止させること, перестанок /зупинка/ 停止, 停留, перкаль /коленкор/ 細綿布, пинявий /копіткий/ 緩慢な, 用心深い, плова /злива/ 雷雨, 暴風雨, плюта /хлющ, злива/ 雨の多い天気, 悪天候, 雨天, повсідень /щодня/ 常に, いつも, 毎日, позем /горизонт, обрій/ 地平線, 水平線, поземність /горизонтальність/ 地平状態, 水平状態, покревність /споріднення/ 親戚関係, 親族関係, покритка /дівчина, що народила дитину/ 私生児の母親, поляпас* /ляпас/ 頬打, помірок /епідемія/ 流行病, 伝染病, помки /пам'ятно/ 忘れないで, попруг /дряпина/ 創根, 搔傷, 爪傷, постріч* /зустріч/ 出合, 遭遇, 出迎, потирач /помикач/ 駆使する人, 虐待する人, потороча /примара/ 幽霊, приспа* /призьба/ 農家の周囲の土堡, прічки! /геть! / 外へ, 出て行け, 失せやがれ, つまみ出せ, 去れ, 打倒せよ, 退け, 失せろ, проміття /заграва/ 天映, псотник /негідник/ 無用者, 役立たず, 道楽者, 悪党, путня /діжка/ 樽, пухкеник /пампушка/ 油揚饅頭の一つ, 丸々した幼児, рандар* /орендар/ 賃借人, 小作人, рачити /зволюти/ 許す, 欲する, 望む, 遊ぶ, рэгнути /прагнути/ 志す, 憧れる, 志向する, рейвах /метушня/ 混乱, 混雑, 騒ぎ, 荒波, рехтельний /дійсний, істинний/ 真実の, 実際の, 確な, 誠実な, риж* /рис/

米, рискаль /заступ/ 鋤, рихва /наконечник/ 金冠, 光端, 金環, рихта /прибуток/ 増加, 利益, 利潤, 儲け, ричка /корівниця/ 牛飼女, ріжний* /різний/ 区別ある, 差異ある, 相違なる, 種々の, ріжниця* /різниця/ 差, 差異, 相違, 不同, 様々の品, 種々の物, ріжно*... /різно... 「様々の」をあらわす接頭辞——筆者注/, різнація /роз'єднання/ 分離, 隔離, 分割, 切断, рішинець* /рішення/ 判決, ріща /вітролом, сушняк/ 風で倒れた木, 枯木, 落枝, робливо /виріб/ 手工品, 細工物, 製品, робом /способом, чином/ ……を用いて, ……に依って, розбрання /розведення, розвід/ 離婚, 離縁, розкаль /розпусниця/ 放蕩女, 道楽女, розпускальність /розчинність/ 融解, 潮解, 可溶性, ронд /збруя/ 馬具, 挽具, роха* /льоха, свиня/ 豚, руля /дуло/ 銃口, 砲口, рухник /двигун/ 動かすもの, 発動機, 原動機, 運動筋, 原動者, сакви /торба, сумка/ 鞆, 背囊, салом'як /нашатир/ 塩化アンモニヤ, свіріпа /гірчиця/ 芥子, 芥子粉, селех /качур, селезень/ 雄鴨, сирів'єць /хлібний квас/ パンのクワス, сирівка /неопалена цеглина/ 生煉瓦, скиндяк /стрічка/ リボン, 飾紐, склиця /емаль/ 硝子玉, बीーズ, скобзалка* /ковзанка/ スケート場, 滑走路, скобзатися* /ковзатися/, скобзун* /ковзун/ スケート, сніт /колода, чурбан/ 木株, снота /дівоcha невинність, незайманність/ 童貞, 浄潔, 処女, соживець /співмешканець, коханець/ 同室者, 同居人, 内縁の夫, стійка /вартівня, караульня/ 番人小舎, 見張小舎, 哨舎, суткі /вузький прохід/ 峡谷, 谷間, 隘路, 狭い廊下, таджеж* /але, авжеж/ ではないか, ならずや, тама /гребля/ 堤, 堤防, 水車用水の池, 防水堤, убільшки* /завбільшки, розміром/ ……大きさの, увособлення* /уособлення, втілення/ 人格化, 人性賦与, 権化, 権現, 化身, 擬人法, угайка /прогаєння, зволікання/ 遲滞, 停滞, узаміт /суцільно, суспіль/ 連続して, 間断なく, 隙間なく, 密接して, 全面的に, 到る所, усобник /крамольник/ 反逆者, 謀反者, 騒乱者, ухналь /цвях для підкови/ 蹄鉄の釘, учта /ушанування/ 饗応, 尊敬, 礼遇, фурман /візник/ 荷馬車の馭者, 荷馬車運送人, 輻重兵, 馭者, хайність* /охайність/ さっばちしたこと, 清浄, 清潔, хісен /вигода, користь/ 利用用, 利益, 為め, хорий* /хворий/ 病人, 病身な, 鴨弱な, хобоба* /хвороба/ 病氣, 疾病, 苦痛, хобобливий* /хворобливий/ 病弱の, 病身の, 苦痛な, 病的な, 不健全な, цмоковик /насос, помпа/ 唧筒, швагер /шурин/ 妻の兄弟, шпола /совок/ 小シャベル, шруб /гвинт/ 螺旋, ねじ, шрубуватий /гвинтоподібний/ 螺状の, штафета* /естафета/ 急使, Батон, 中継競争, щимки /лещата/ 圧搾機, 万力, юриста* /юрист/ 法律家, 法律学者, 法律学士, як ся маєте? /як справи? /徵機嫌は如何ですか, ясокір* /осокір/ 黒楊樹。

(資料3) 廢語 (過去の表現, 古語)

бабизна /спадщина від баби/ 祖母の遺産, бабити /акушерувати/ 助産する, біговнсько /іподром/ 競馬, 競馬場, боргувати /брати кредит/ 貸方に記入する, 借金する, 貸す, борня /боротьба/ 闘争, бровар /пивовар/ 麦酒醸造人, бузувір /бусурман/ 回教徒, бунчужний

/вахмістр/ 騎兵曹長, буцегарня /арештантська/ 留置場, верцадло /компас/ 羅針盤, винуватель /обвинувач/ 告訴者, 求刑者, відпоручник /довірена особа/ 代理人, 受託人, вітрогон /вентилятор/ 輕薄漢, 扇風機, гамарня /металоплавильний завод/ 製鉄所, герць /поєдинок/ 決闘, голяр /перукар/ 理髮師, голярня /перукарня/ 理髮店, джура /слуга/ 從卒, 召使, дзигармайстер /годинникар/ 時計師, дідич /поміщик/ 地主, 領主, дієпис /історія/ 物語, 歴史, етер* /ефір/ エーテル, злучник /сполучник/ 接続詞, 團結者, 連結機, ідло /їжа, страва/ 食物, 食料品, 栄養物, керма* /кермо, правіло/ 舵, 舵機, коповик /50 копійок/ 五十錢, маєток /господарство/ 領地, 所有地, мапа /карта/ 地図, нотар* /нотаріус/ 公証人, огир /жеребець/ 牡馬, 種馬, одопрілнюватися /відокремлюватися/ 分れる, 分離する, 離す, окульбачити /осідлати/ 鞍を置く, 装鞍する, орудар /керівник/ 指南者, 指導者, охвіра /жертва/ 犠牲, 供物, повіт /територіально-адміністративна одиниця/ 動機, 機会, 原因, 理由, посесор /орендар/ 賃借人, 小作人, 借地人, ратай /плугатар/ 農夫, 百姓, регула /статут/ 規則, 規定, 定款, 法規, 法令, 月経, ресторація* /ресторан/ レストラン, 料理店, 飲食店, ретяз /ланцюг/ 鎖, ЧЕУН, розвій* /розвиток/ 発達, 進歩, 進化, 成長, 進展, смок /насос, помпа/ 唧筒, спиж /бронза/ 青銅, текстура /картон/ 厚紙, БОРЛ紙, тепломір /термометр/ 寒暖計, 体温計, чайма /вітрило, парус/ 帆, 帆船, челядник /слуга/ 下男, щерба /юшка з риби/ 魚の煮汁, янгол* /ангел/ 天使, ярь /весна/ 春蒔穀物, 春, ясир /полон, полонені/ 幽囚, 捕虜の状態, 捕虜, ясирник /невільник, полонений/ 捕虜, 奴隸。

(資料4) 俗語 (無遠慮な語彙, 蔑称, 罵言, 卑語)

бабодур 放蕩者, 女たらし, базікати 喋る, балабонити 鐘を鳴らす, 吹聴する, бухикало 咳する人, вайлом 総体で, 一魂となつて, верещака 喚く人, вибріхуватися 嘘を吐く, виканючити 懇願して得る, витребеньки 工夫, 考案, 思い付き, 作り話, витребенькуватий 移気な, 我儘な, витуряти 追出す, 駆逐する, відчухрати 伐り取る, 切る, второпати 会得する, 理解する, галайда 放蕩者, 無宿者, гулі 散歩, 遊歩, гультіпака 浮浪人, 放蕩兒, до-цурки 全然, すっかり, дурепа 大馬鹿者, завадіяка 暴れ者, 争い好の人, загугнявити 鼻声で話し始める, задерикуватий 争い好きの, 乱暴な, збабіти 女の様になる, 女のように振舞う, ідом, ідцем 食つて, 絶えず悩まして, істоньки 食べる, 食欲がある, йолоп 阿呆, 大馬鹿, кидькома 投げて, крутько 輕佻漢, 落ち着かぬ人, ломака 棍棒, 杆, маруда もぐもぐ言う人, もぐもぐ噛む人, 野呂間, мигикати 鼻歌を歌う, 鼻声で歌う, мимрити 呟く, もぐもぐ言う, митикувати 考慮する, 比較対照する, мішма 雑つて, 交互に, 交替に, мугир 無作法者, 無教育者, мурло 獸の鼻面, 無教育者, м'яло もぐもぐ噛む人, もぐもぐ言う人, набундючитися 誇る, 尊大に構える, 傲慢ぶる, на-гамуз 粉々に, 微塵に, невмивака 手や顔を洗わぬ人, 汚れた人, недоумок 馬鹿者, нездара 無能, 無才, нероба 懶惰者, 不精者, нетіпанка 不潔な女, 不浄の女, нетяга 土地

を持たぬ貧乏百姓, 水呑百姓, 日傭人, неук 無学者, 無作法者, 野人, нечупара 不潔な人, 汚
 い人, だらしのない人, 自墜落な人, оговтатися 正気付く, 蘇生する, 思い直す, 気が付く,
 окощобіти 寒さで硬くなる, 凍る, かじかむ, опецьок 太った小児, ずんぐりした男, 片意地な
 男, остобісілий 気に入らぬ, 面白がらぬ, 厭になった, 厭わしい, 五月蠅い, остобісіти 嫌いに
 なる, очевидячки 明瞭に, 明白に, 歴然と, паскуда 醜行者, паскудити 醜い言行をする, 汚い
 風をする, пелехатий 竜毛の生えた, 軟毛の多い, пелька 喉頭, перебрех 誤り伝えること, 誤
 って話すこと, пинда 自惚, 傲慢, пиндючити 突出す, 露出させる, пиндючитися 勿体振る,
 傲然と構える, писок 鼻面, 面, пищорка 小顔, 醜い顔, підсліпа かなり近視の人, かなり視力
 の弱い人, 目のよく見えぬ人, підцьокувати 下から鞭つ, 鼓舞する, 煽いで喧嘩をさせる, けし
 かける, піяка 泥酔者, 酒飲み, плаксіи 泣蟲, बेそを搔く人, побазікати 談話する, お喋りする,
 побрехенька 小話, 逸話, покидька 投棄てられたもの, почвара 幻, 幻影, 幽霊, почикрижити
 細かく切る, 粉々にする, 小又であるく, почовпати 少し踏鳴らす, придуркуватий 薄馬鹿の,
 прителіпатися やっと辿り着く, やっと歩く, прителющити 曳いて来る, 曳寄せる, пробазікати
 早口に不明瞭に言う, 喋り通す, прудниус 口髭の多い人, рахуба 面倒, 厄介, 苦勞, 心配, 奔走,
 世話, 斡旋, 多忙, рева 大声に叫ぶ人, ревище 大声に叫ぶ, репіжити 打つ, 叩く, 打ちのめ
 す, したたか撲る, ひどく値切る, розбишака 強奪者, 掠奪者, 強盗, 乱暴者, розгардіяш 不精,
 だらしのないこと, 無秩序, роззява ぽかんと口をあけている人, 怠惰者, розпанахати 引き裂く,
 引破る, 分列させる, розпаскудитися 卑劣な割を加える, розприндитися 威張る, 自慢する, 尊
 大振る, розумак 分別者, 利口者, 知恵者, сидун 歩み出しの遅い小児, 足の悪い人, 蟄居者,
 出嫌い, слинько 涎を垂らす人, 涎くい, спаскудити 損う, 台なしにする, 汚す, 穢す,
 стямкувати 考慮する, 考量する, 会得する, 覚る, сшахрувати 狡く振舞う, 狡猾に構える, 巧
 くやる, такечки 然り, その通り, терликати 下手に弾く, триндикати 演奏で儲ける, 軽く演
 奏する, тринькати 浪費する, 濫費する, 追散らす, угадько 推察者, 推量者, усяково 様々に,
 どっち道, 兎も角も, халабуда 仮小舎, 堀立小舎, 庇, 庇と柱だけの納屋, 天蓋, хамло 下司,
 下郎, 賤しい仕事をする人, хвалько 自慢屋, 天狗, 高慢家, 法螺吹き, ходня 歩行, 歩き過ぎ,
 通行, 通用, циганити 物乞いする, からかう, 馬鹿にする, 愚弄する, 馬を不正手段で取引する,
 図々しくねだる, чвалати やっと歩く, 遅々と歩く, 跡をつける, червонопикий 眉目よき,
 черевань 腹の皮, 内臓, 臓腑, 腹, чимчикувати 速やかに歩く, чорт-ма 馬鹿々々しい, そうは
 巧く行くものか, 無い, 居たい, 存在しない, чорторий 渦巻, чухмаритися 掻合う, шавкотіти
 しゅーしゅー言う, もぐもぐ言う, швендя せかせかして落着かぬ人, швендяти 漫歩する, ぶら
 つく, 浮浪する, шелепуватий 少々愚な, 少々馬鹿げた, шилихвіст 悪漢, べてん師, ならず者,
 шмаркатий 鼻涕ある, шмаркач 鼻涕ある人。

(資料5) 国や国家の名称

Австралія 豪州, Америка アメリカ, Арабія アラビヤ, Гишпанія 西班牙, Італія 伊太利,
Мадярщина 洪牙利, Московія 露西亞, Московщина ロシヤ (露西亞), Німеччина 独逸,
Ніппон 日本, Румунія ルーマニヤ, Сербія セルビヤ, Туреччина 土耳其, Угорщина 洪牙利,
Україна ウクライナ, Японія 日本。